

本日の講義内容

- 探索(1)
 - 探索とは
 - 線形探索と二分探索
 - ハッシュ法
 - **●** ハッシュ法の原理
 - チェイン法
 - オープンアドレス法
 - ハッシュ関数,他

1

2

教科書 第7章 (pp.183~185)

探索とは?

線形探索·二分探索

探索とは

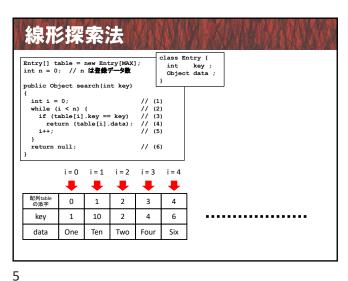
- ◆表の中からある特定の値を持つデータを探すこと
- Ex.: 名前をもとに個人データを探す
- 通常は「与えられた値と一致する」という条件が対象
- ●探索は以下の機能から構成される

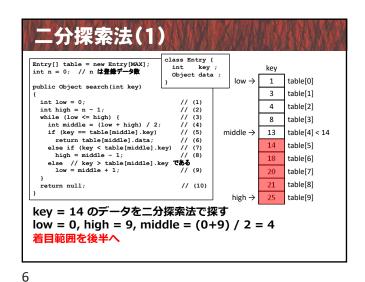
挿入: データを表に登録する

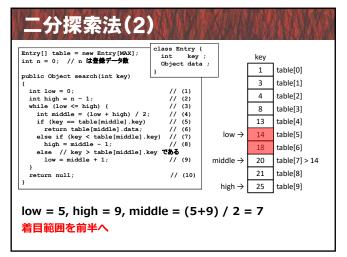
● 探索: 与えられた値をキーにもつデータを探す ● 削除: 与えられた値をキーに持つデータを削除する

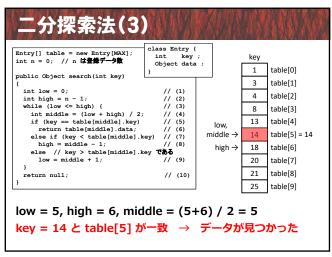
● これらの機能を備えた抽象データ型は「辞書」

3









7 8

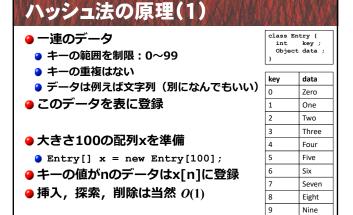
計算量(1回あた 挿入	きり) 線形探索法 <i>O</i> (1)	二分探索法 O(n)
探索	O(n)	$O(\log n)$
削除	O(n)	O(n)

教科書 第8章(pp.186~190) ハッシュ法 ハッシュ法の原理

9 10

ハッシュ法(hashing)

- データ量によらず挿入,探索,削除の計算量が O(1)
- キーの値をデータの格納位置に直接関連付ける
 - データの格納位置=配列の添字



ハッシュ法の原理(2)

- **データがセットされているか否かを区別するには?**
 - フラグを持たせる方式
 - boolean[] occupied = new boolean[100];
 - MyData[] data = new MyData[100];
 - occupied[n] が true なら data[n] にデータあり
 - **データとして現れない値をフラグに**
 - 参照型なら null を利用
 - double 型なら Double.NaN を利用

ハッシュ法の原理(3)

- キーの範囲の制限をなくすには?
 - キーの値を配列の添字の範囲に写像する関数h(x)を導入
 - 関数h(x)をハッシュ関数(hash function)と呼ぶ
 - ハッシュ関数が返す値はハッシュ値(hash value)
- ハッシュ関数を利用して配列にデータを格納
 - キーの値がaならば, table[h(a)] にデータを格納
- ハッシュ関数の計算量が O(1) ならば, 挿入・探索・削除も O(1)
- 4 用語
 - データを格納する配列:ハッシュ表(hash table)
 - ハッシュ表の各要素:バケット(bucket)

13 14

衝突

- 異なるキーに同じハッシュ値を生成する可能性
- 🝊 例

15

- 文字列をキーとするデータを大きさ100の配列に格納
- ハッシュ関数は文字列中の文字コードを加算し100で剰余

static int hash(String s)
{
 int sum = 0;
 for (int i = 0; i < s.length(); i++) {
 sum += (int)s.charAt(i);
 }
 return sum % 100;
}</pre>

one 22 two 46 three 36 four 44 five 26 six 40 seven 45 eight 29

26

nine

ten

文字列 ハッシュ値

- fiveとnineのハッシュ値が同じ:衝突
- 衝突の対策が必要

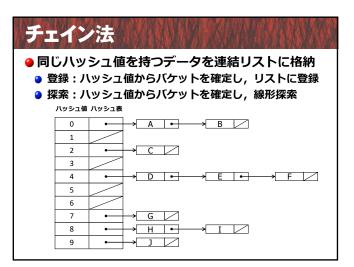
16

衝突の対策

- ●同じハッシュ値を持つデータを連結リストに格納
 - チェイン法,連鎖法 (chaining)
- 直接チェイン法 (direct chaining)
- オープンハッシュ法(open hashing)
- 別のバケットにデータを格納
 - オープンアドレス法, 開番地法 (open addressing)
 - クローズドハッシュ法(closed hashing)

教科書 第8章 (pp.190~200)

ハッシュ法 _{チェイン法}



チェイン法の実装(1)

- チェイン法でハッシュを実現するクラスHashC
 - 連結リストのセルを内部クラスCellとして定義
 - **⇒** キーはMyKeyクラスとして定義
 - Cellクラスの配列tableがハッシュ表

詳細は教科書 pp.191~195 List 8.2

```
チェイン法の実装(2)
```

- コンストラクタ
 - バケット数=配列の要素数を指定
 - 未指定時はデフォルトの値(50)を採用

詳細は教科書 pp.191~195 List 8.2

```
public class HashC {
   static final int DEFAULT_BUCKET_SIZE = 50;
   public HashC()
   {
     this(DEFAULT_BUCKET_SIZE);
   }
   public HashC(int bucketSize);
   table = new Cell[bucketSize];
   this.bucketSize = bucketSize;
   nElements = 0;
   }
}
```

20

MyKeyクラス

@3つのメソッド

19

- equals: 2つのキーが等しいかどうかを返す
- hashCode:キーのハッシュ値を返す
- toString: キーの内容を文字列で返す

詳細は教科書 pp.196~197 List 8.3

チェイン法の実装(3)

- ハッシュ値の計算
 - hashメソッドでハッシュ値を計算
 - MyKeyクラスのhashCodeメソッドで得られた値を bucketSizeで割って得られた剰余を返す

詳細は教科書 pp.191~195 List 8.2

```
public class HashC {
  private int hash(MyKey key)
  {
    return key.hashCode() % bucketSize;
  }
}
```

22

チェイン法の実装(4)

🥝 探索

21

- 探したいキーの値をパラメータとして受け取る
- キーが含まれるはずのバケットについてリストを探索
- キーと一致するものがなければnullを返す

詳細は教科書 pp.191~195 List 8.2

```
public class HashC {
  public Object find(MyKey key)
  {
    for (Cell p = table[hash(key)]; p != null; p = p.next) {
        if (key.equals(p.key)) {
            return p.data;
        }
    }
    return null;
}
```

チェイン法の実装(5)

● 挿入

- 登録するキーとデータをパラメータとして受け取る
- キーを探索し既に登録済みかどうかをチェック
- 登録済みでなければ連結リストに登録

詳細は教科書 pp.191~195 List 8.2

```
public class HashC {
    public boolean insert(MyKey key, Object data)
    {
        if (find(key) != null) {
            return false; // 既にデータが登録されているので失敗(false)
        }
        Cell p = new Cell(key, data);
        int h = hash(key);
        p.next = table[h];
        table[h] = p;
        nElements++;
        return true;
    }
}
```

チェイン法の実装(6) ● 削除 削除するキーをパラメータとして受け取る 該当するキーをもったデータが存在すれば削除 先頭(境界条件)を扱う必要がある 詳細は教科書 pp.191~195 List 8.2 public class HashC { public boolean delete(MyKey key) { h = hash(key); if (table[h] == null) { // パケットが空なら失敗 return false; ; if (key.equals(table[h].key)) { // 削除対象が先頭の場合の処理 // 省略 Cellp, q; Collp, q; for (q = table[h], p = q.next; p!= null; q = p, p = p.next) { if (key.equals(p.key)) { // 省略 }

チェイン法の解析

●バケット数:B, データ数:N

→ ハッシュ値の生成は均等と仮定

● 探索の計算量: O(1 + N/B)

● ハッシュ値の計算: O(1)

● リストの探索: O(N/B)

● 挿入の計算量: O(1 + N / B)

● 挿入: O(1)

● 重複チェック: O(N/B)

● 削除の計算量: O(1 + N/B)

● 削除: O(1)

削除対象の探索: O(N/B)

N に対して B が十分大きければ N/B は定数 O(1 + N/B) = O(1)

26

25

教科書 第8章 (pp.200~213)

ハッシュ法 オープンアドレス法 オープンアドレス法

- 衝突の際にある手順で別のバケットにデータを格納
- 手順:再ハッシュ(rehashing)
- ハッシュ表にはデータそのものを登録
 - キーxのハッシュ値 h(x)のバケットが空でない場合, 再ハッシュ手順にしたがって次のバケットを調べる
 - 再ハッシュを k 回行って得られるハッシュ値: h_k(x)
 - 再八ッシュを B 回行っても空のバケットがなければ満杯

30

- キー x のハッシュ値 h(x) のバケットを調べ,キー x のデータならば探索終了
- そうでないなら再ハッシュ手順にしたがって $h_1(x)$, $h_2(x)$, … を順に調べる

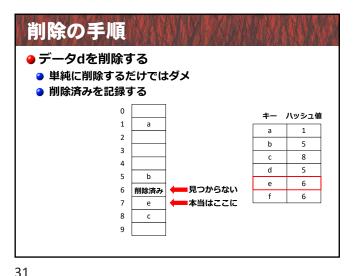
27 28

再ハッシュの手順

- **◆ キーxの所属すべきバケットから順に調べる**
 - $h_k(x) = (h(x) + k) \bmod B$

オープンアドレス法の動作 **● a~eの順番でハッシュ表に登録** バケットに空きがなければ再ハッシュ 0 キー ハッシュ値 1 1 а 2 b 5 3 С 8 4 d 5 5 6 6 7 8 9

● バケット数 B 素数 or 2ⁿ - 1 29



オープンアドレス法の実装(1)

- ●オープンアドレス法でハッシュを実現するクラス **HashOA**
 - バケットを内部クラスBucketとして定義
 - **⇒** キーはMyKeyクラスとして定義

```
● Bucketクラスの配列tableがハッシュ表
                                         詳細は教科書 pp.205~209 List 8.4
         public class HashOA {
           private static class Bucket {
             MyKey key;
Object data;
             private Bucket (MyKey key, Object data) {
               this.key = key;
this.data = data;
                                                           HashCと違い
                                                           配列tableに直接
                                                           データを格納
                    table; // ハッシュ表
bucketSize; // パケットの個数
nElements; // 登録されているデータ数
           .
Bucket[] table;
```

オープンアドレス法の実装(2)

- コンストラクタ
 - バケット数=配列の要素数を指定
 - 未指定時はデフォルトの値(53)を採用
 - ハッシュ表を空を表すEMPTYで初期化

```
詳細は教科書 pp.205~209 List 8.4
public class HashOA {
   static final MyKey DELETED = new MyKey(null); // 削除済みを表す
  static final MyKey EMPTY = new MyKey(null); // 空を表す
static final int DEFAULT_BUCKET_SIZE = 53; // サイズは素数が望ましい
```

```
public HashOA() {
   this (DEFAULT BUCKET SIZE) ;
public HashOA(int bucketSize)
   table = new Bucket[bucketSize];
for (int i = 0; i < bucketSize; i++) {
  table[i] = new Bucket(EMPTY, null);</pre>
    this.bucketSize = bucketSize;
```

33

オープンアドレス法の実装(3)

- MyKeyクラスは共通
- ハッシュ値の計算:チェイン法と同じ
 - hashメソッドでハッシュ値を計算
 - MyKeyクラスのhashCodeメソッドで得られた値を bucketSizeで割って得られた剰余を返す

32

● 現在のハッシュ値に1を加えてbucketSizeで剰余演算

詳細は教科書 pp.205~209 List 8.4

```
public class HashOA {
  private int hash(MyKey key) {
  return key.hashCode() % bucketSize;
   private int rehash(int h) {
  return (h + 1) % bucketSize;
```

オープンアドレス法の実装(4)

🥝 探索

35

- キーのハッシュ値で示されるバケットから探索を開始
 - 一致するキーがみつかる
- まで再ハッシュしながら調べる
- 「空」のバケットがみつかる」

```
詳細は教科書 pp.205~209 List 8.4
public class HashOA {
  public Object find(MyKey key) {
     int count = 0;
int h = hash(key);
    MyKey k;
while ((k = table[h].key) != EMPTY) {
  if (k != DELETED && key.equals(k)) {
    return table[h].data;
       if (++count > bucketSize) {
return null; // 全部調べても見つからなかった
                                                 探索数をチェックし,
       h = rehash(h);
                                                   全部調べたら終了
     return null:
```

オープンアドレス法の実装(5)

● 挿入

34

コードは割愛, 詳細は教科書 pp.205~209 List 8.4

- キーのハッシュ値で示されるバケットから開始し、 再八ッシュしながら順に調べる
 - 「空」か「削除済み」のバケットがみつかる → データを登録
 - **一致するキーがみつかる** → エラー(falseを返す)
- 再ハッシュ回数がバケット数を超えたら例外処理
- 🥝 削除

- キーのハッシュ値で示されるバケットから開始し、 再八ッシュしながら順に調べる
 - 一致するキーがみつかる → DELETEDにして「削除済み」に
- 「空」のバケットがみつかる → 見つからなかった
- 再八ッシュ回数がバケット数を超えたら見つからなかった

再ハッシュ手順

- 衝突が発生すると連続したバケットが埋まる
- ●解決案1:バケットを c 個おきに調べる
 - $h_k(x) = (h(x) + ck) \bmod B$
 - c個おきのバケットが連続的に埋まるで解決ではない
- ●解決案2:再ハッシュのたびにランダムに選択
 - 1 ~ B − 1 までに数が1回だけランダムに出現する数列 n₁, n₂, ... n_{B-1} を準備
 - $h_k(x) = (h(x) + n_k) \bmod B$

 n_k : 6, 1, 4, 7, 2, 9, 8, 3, 5

ハッシュ値3:9,4,7,0,5,2,1,6,8

ハッシュ値1:7,2,5,8,3,0,9,4,6

オープンアドレス法の解析

α = <u>登録したデー</u>タ数 全バケット数

	(A) 順にバケットを調べる	(B)ランダムにバケットを調べる
探索成功	$\frac{1-\alpha/2}{1-\alpha}$	$\frac{1}{\alpha}\log_e \frac{1}{1-\alpha}$
探索失敗	$\frac{1}{2} + \frac{1}{2(1-\alpha)^2}$	$\frac{1}{1-\alpha}$
α = 80% (探索成功)	3.0個	2.0個
α=90% (探索成功)	5.5個	2.6個

● (A)で80%, (B)90%が最大使用率の目安

37

教科書 第8章 (pp.214~217)

ハッシュ法 ハッシュ関数. 他 ハッシュ関数

38

- ゅ均等なハッシュ値が発生することを前提
- 実際のキーに対して事前に実験したほうがよい
- できるだけキーのすべてのビットがハッシュ値に 影響を与えるようにする
 - Ex. 文字列の1文字目だけより文字コードの和を使う
- ◆ キーの値を2乗してその中央をとる(平方採中法: middle-square method) の結果は良好
- JavaではhashCodeメソッドでハッシュ値を計算
 - 詳細は,教科書第3章の「hashCodeメソッドを定義する」

39 40

ハッシュ法の応用

- ◆ 大きなデータを大量に比較する場合
 - 各データのハッシュ値を予め計算
 - ハッシュ値を比較し等しくなければ次の処理へ
- 通信データやファイルの改ざんを防止
 - 送信側と受信側でハッシュ値を求めて比較
 - 一方向ハッシュ関数を利用

詳細は教科書 8.6節 pp.215~216

ハッシュ法の性質

- ハッシュ法の高速性はハッシュ表の大きさによる
- △ データの個数
 - チェイン法ではバケットの個数の数倍程度
 - オープンアドレス法ではバケットの個数の80~90%程度
- メモリ使用量: 1000個のデータを扱うなら
 - チェイン法:400~500個のバケット
 - 「基本料金+従量制料金」
 - オープンアドレス法:1176個(85%と仮定)
 - 「完全固定料金制」

42

まとめ

- ❷ 探索とは
- 線形探索と二分探索
- ❷ 八ッシュ法
 - ハッシュ法の原理
 - チェイン法
 - オープンアドレス法
- ハッシュ関数,他

参考文献

- ◆ 定本 Javaプログラマのための アルゴリズムとデータ構造(近藤嘉雪)
- ●新・明解 Javaで学ぶ アルゴリズムとデータ構造(柴田望洋)
- 岩波講座ソフトウェア科学 3 アルゴリズムとデータ構造(石畑清)
- Javaで学ぶアルゴリズムとデータ構造 Robert Lafore (著)・岩谷 宏(翻訳)
- Java アルゴリズム+データ構造完全制覇 オングス (著)・杉山 貴章・後藤 大地 (監修)